

「万葉集をよむ ― 東歌をよむ ―」

群馬県立女子大学名誉教授 北川和秀

平成二十九年十月六日
桐生市立中央公民館

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	} 東海道 - 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	} 東海道 } 東山道
	譬喩歌 9	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	} 東海道 } 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

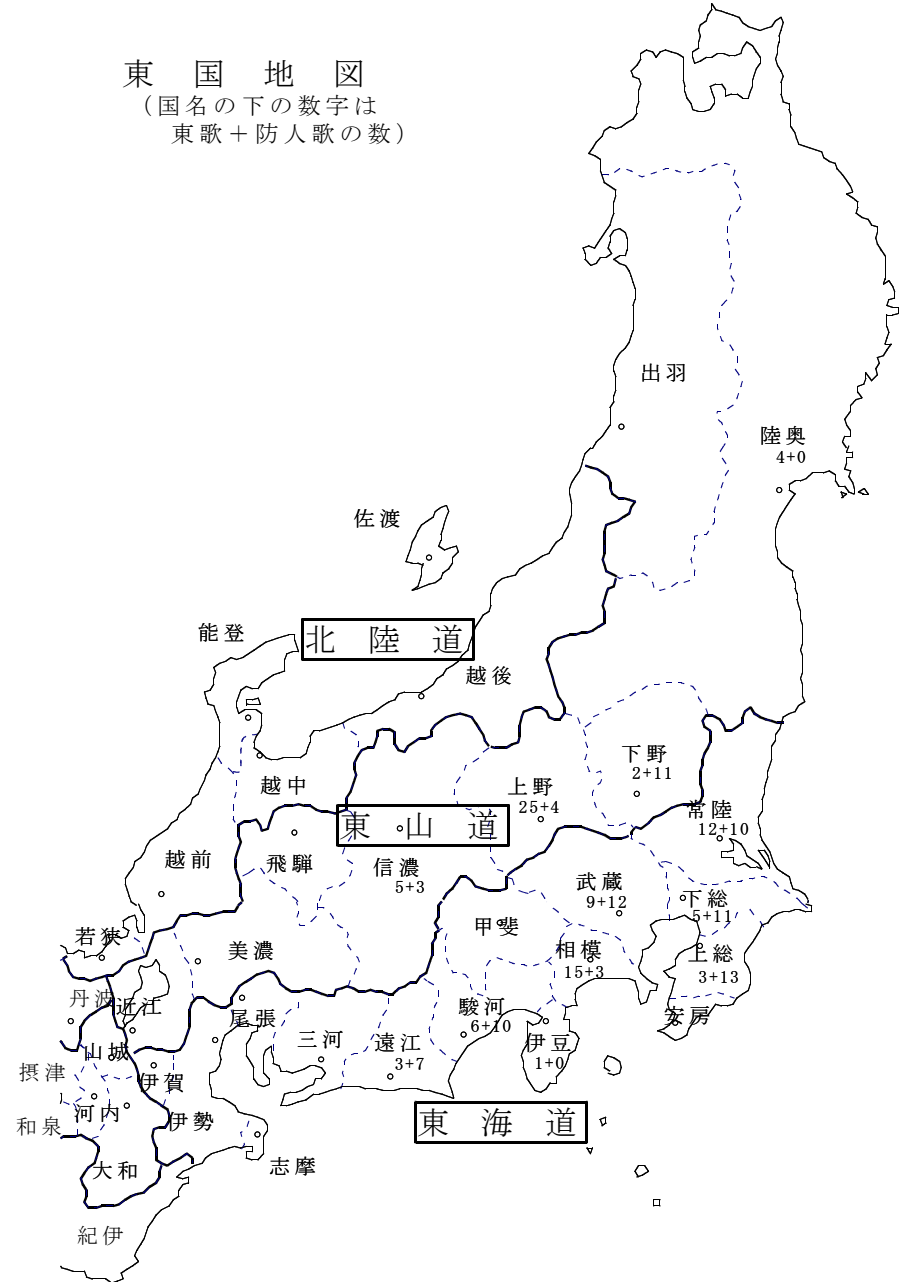
◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首
	84首 / 166首

②昔年防人 … 8首
合計 92首

東国地図
 (国名の下の数値は
 東歌+防人歌の数)



【碓氷】

① 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なの袖もさやに振らしつ (三四〇二) 上野東歌
 (碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはつきりとお振りになった)

② ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも (四四〇七) 上野防人歌
 右の一首は、他田部子磐前のなり。

(碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募って、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ)

【伊香保】

① 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ (三四二一) 上野東歌
 (伊香保の峰に雷よ鳴ってくれな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね)

* 「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。旧伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか(厳) + ほ(穂・秀)」と考えられる。
- ・「ほ(穂・秀)」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎(ほのほ)」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか(厳)」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」(『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項)を表す語で、「いかし(厳し)」「いかめし(厳めし)」「いかる(怒る)」「いかづち(雷)」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか(厳)」は、この山のもつどのような性格を「いか(厳)」ととらえたのであるうか。

・山の姿
・雷の巣窟
・火山

- ②伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり(三四二二) 上野東歌
(伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言うが、私があるあなたを思う恋心ばかりは止むときがないことだ)

* 参考

「韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」(三六七〇)
「荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」(三八九一)

- ③上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり(三四二三) 上野東歌
(上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ)

* 参考

「わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」(1041)

- ④伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の躰ろまでもさ寝をさ寝てば(三四一四) 上野東歌
(伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまふほど一緒に寝ていられたらなあ)

【佐野】

①上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（三四二〇）上野東歌

（上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまおうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりしない）

②上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（三四一八）上野東歌

（上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めた。今さらどうにかできようか。できはしない）

【多胡】

○吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（三四〇三）上野東歌

（私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ）

*参考

「……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……」

（多胡碑 七一年）

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。入野村という村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

【久路保】

○上毛野久路保の嶺ろの葛葉がた愛しけ子らにいや離り来も（三四一二）上野東歌

（上野国の赤城山の葛葉のカズラが枝分かれしながらそれぞれ延びてゆくように、愛しいあの娘と別れ、ますます遠く離れて、ここまで来てしまったことだなあ）

平成十七年まで存在した黒保根村は、明治二十二年の町村合併の際、宿廻・水沼・八木原・上田沢・下田沢・上神梅・下神梅・塩沢の八ヶ村が合併して成立。黒保根村という村名は、東歌の「久路保の嶺ろ」が赤城山を指すとする説を採用して命名された。

【安蘇】

①上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（三四〇四）上野東歌

（上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持をいったい私はどうしたらいいのだろう）

*参考

「下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ」（三四二五）下野東歌

「高麗錦紐解き放けて寝るが上に何どせるとかもあやに愛しき」（三四六五）

（紐を解き放って共寝をしているのに、この上一体どうしろというのか、なんともいとしてたまらないことよ）

② 上毛野阿蘇山葛野を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ（三四三四） 上野東歌

（上野国の阿蘇山の蔓草は、野が広いのを幸いに遠くまで這い延びてゆく。こんなに這い延びたものがどうして途中で絶えたりしようか）

【丹生】

○真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは（三五六〇） 未勘国東歌
（丹生の赤土のように、はつきりと表に出しては言わないだけだ。私が恋しているということとは）

*参考

「白真砂御津の埴生の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらくは」（二七二五）

【利根川】

○利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三） 上野東歌

（利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなただこと）

【その他】

① 上毛野平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（三四〇五） 上野東歌

（上野国の平度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで）

② 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（三四〇五或本）

（上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで）

③ 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇） 未勘国東歌

（左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまった）

④ 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四） 未勘国東歌

（子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしていたいとは思いう。あなたは どう思う？）

- ⑤ 上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）上野東歌
（上野国の可保夜の沼のイハキツラが、引つ張ればずると寄つて来るように、私に寄つてきて、いつまでも仲を絶やさないうで欲しい）

*参考

「入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね」（三三七八）

武蔵東歌

「西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。……名に高きかほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては俤すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。」
（奈佐勝卓『山吹日記』天明六年「五月十三日条」）

*「うのとしのわざはひ」は天明三年1783の浅間山の大噴火によつてもたらされた災害

【上野国防人歌】

- ① 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）

右の一首は、助丁上毛野牛甘のなり。

（難波への道が無事に行つて帰つてきてくださうと言つて妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ）

- ② わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ（四四〇五）

右の一首は、朝倉益人のなり。

（妻が、思い出すよすがにしてほしいと言つて縫い付けてくれた紐は、たとえすり減つて糸になつても私はほどこいたりするものか）

- ③ わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）

右の一首は、大伴部節麻呂のなり。

（わが家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、私が苦しい旅をしていると家族に知らせてやれるのに）

- ④ ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（四四〇七）

右の一首は、他田部子磐前のなり。

（碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募つて、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ）前掲